

鳥インフルエンザ

清水の養鶏場で鳥インフル 道内初 21万羽殺処分 半径10キロ以内の出荷停止

2016年12月17日

【清水】道は16日、清水町内の養鶏場で飼育する採卵用の鶏から、毒性の強い高病原性鳥インフルエンザの陽性反応が出たと発表した。十勝総合振興局などは周囲の防疫体制を強化し、17日正午からは同農場の鶏約21万羽全ての殺処分を始めた。道内の家きん（家畜の鳥）から高病原性鳥インフルエンザが確認されたのは初めて。



防護服を着て養鶏場へ入る関係者（17日午前、清水町）

農林水産省によると、高病原性鳥インフルエンザは致死率や感染力が強く、国内の家きんから陽性反応が出たのは新潟、青森の各2例に次いで今年5例目。遺伝子検査の結果でH5亜型と分かった。国内では感染した鶏の肉や卵を食べて人にウイルスが感染した事例は報告されていない。

道庁と十勝総合振興局は16日深夜に対策本部を設置。発生農場から半径3キロ以内にある養鶏場1戸（約1万2000羽）に家きんの移動を、同3～10キロ以内の6戸（計約18万羽）に出荷を含む搬出をそれぞれ禁じた。対策本部長の梶田敏博局長は「関係機関と危機感を共有して防疫に取り組み、住民に不安を与えないように正しい情報を伝えてほしい」と語った。

殺処分は同振興局や清水町、陸上自衛隊などの約700人体制で実施。防疫資材の搬入が遅れたため、当初の予定から2時間後の正午に始まった。処分した死骸は農場

敷地内に掘った穴に埋却する。24時間以内の殺処分、72時間以内の埋却を目指し、鶏舎の消毒を行い、その後異常がなければ3週間後に防疫措置を終える。

同振興局によると16日午前10時、採卵鶏約30羽が死んだと発生農場から十勝家畜保健衛生所に通報があった。死んだ5羽と生きている2羽の簡易検査で陽性反応があり、さらに遺伝子検査で調べた結果、同日夜に高病原性と判明した。

発生農場から半径3キロと同10キロ地点の国道38号など道路10カ所に消毒ポイントを設置。薬剤を含んだマットを敷いて、通行車両による感染拡大を防ぐ。

道内の高病原性鳥インフルエンザの感染は、野鳥では確認されているが家きんからの例はない。

管内では上士幌町内で12日、音更町内で14日に見つかった野鳥の死骸から鳥インフルエンザの陽性反応（簡易検査）が出ており、現在は北大で遺伝子検査をしている。

<鳥インフルエンザ>

インフルエンザウイルスによって感染する鳥類の病気。家禽（かきん）が感染すると高い確率で死ぬ高病原性と、毒性が弱い低病原性に分かれる。ふんなどを介して感染し、渡り鳥が飛来する秋から春にかけてまん延する傾向がある。感染した鳥やその排せつ物、死体、臓器などに接触して大量のウイルスが入ってしまった場合、まれに人に感染することがあるが、肉や卵を食べて感染した事例は報告されていない。

清水・鳥インフル 殺処分と埋却 終了 28万4千羽

2016年12月20日

【清水】町内の養鶏場で採卵鶏が高病原性鳥インフルエンザに感染した問題で、道は20日午前7時までに、殺処分と埋却処分を終えた。同日午前は、道職員や自衛隊員らが、鶏舎に残った卵や餌などの除去や消毒作業を行っている。殺処分、埋却した鶏の数は最終的に約28万4000羽となった。

20日は朝から鶏舎内に残る卵や餌、ふんなどを取り出しフレコンバッグに入れる作業が行われた。同時に石灰などをまく消毒作業もしている。鶏舎が22カ所にわたるため、作業は21日も続けられる可能性がある。

鶏の殺処分は、作業途中でひよこなどの数が当初の見

込みより多いことが判明。19日午後9時に全ての殺処分を終えた。同時並行した埋却処分は夜間も行い、同センター敷地内に掘った深さ4～6メートルの2列の穴に20日午前4時までに埋めた。その後は土で覆い、消毒を行って最終的な作業は午前7時に終わった。